

「わたしが選んだ」

ヨハネによる福音書 15 章 11-17 節

イエスさまは、弟子たちのことを友と呼ばれます。これはイエスさまが、弟子たちや私たちのことを特別な者として見てくださっているということです。私たちにとって、こんなに嬉しいことはありません。しかし同時に、戸惑いを覚えてしまうこともあります。果たして私たちは、イエスさまから友と呼ばれるにふさわしい者なのなのかと。実際、イエスさまから「友」と呼ばれた弟子たちは、それから間もなく、捕らえられたイエスさまを見捨てて皆逃げ出してしまうのです。

なぜ、イエスさまは、こんな弟子たちのことを「わたしの友」と呼ばれるのでしょうか。弟子たちが自分を見捨てて逃げていくことを知っているはずなのに、どうして「友」と呼ばれたのでしょうか。確かに、イエスさまはこう言われました。「わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である」(14)と。けれども、その言葉どおりなら、イエスさまが「友」と呼ぶことのできる人は、一人もいませんでした。それは、弟子たちだけに限ったことではありません。今、この言葉を聞く私たちにも、そのことは突き刺さってきます。

では、イエスさまの命じることを行えなければ、「あなたは私の友じゃない」と言われてしまうのでしょうか。そんなことはありません。イエスさまが友と呼んだ人は、このあとイエスさまを見捨ててしまう弟子たちです。イエスさまが予告されたとおりにイエスさまを否定してしまうペトロです。また、もう一人、思い出すべき人がいます。それはイエスさまを裏切ったイスカリオテのユダです。マタイによる福音書では、彼に向かって語られたイエスさまの最後の言葉が記されています。「友よ、しようとしていることをするがよい」(マタイ 26:50)。キリストが「友」と呼ばれた人間は、このユダであり、ペトロであり、私たちです。

さらにもっと言えば、神さまが「ご自分の民」とされた民は、何世代にもわたって契約を破り、神さまに背いてきた人々です。神さまを否定して偶像を拜んでしまった人々です。けれども、神様は、そんな民を滅びることのないように預言者を送り、王を導き呼びかけ続けて来られたのです。わたしはあなたと共にいる、互いに愛し合う者となるように私は付き合い続けると。

これが、私たちの神であり、救い主である方の姿です。そして、そのイエス・キリストがこう言われるのです。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」(13)。

ここを直訳的に表現すると、「人がその友のために命を捨てる、これより大きな愛を持っている人はいない。…これより大きな愛を誰も持っていない」となります。確かに、友のために自分の命を捨てるほどに大きな愛はないと言えます。けれども、ここでのイエスさまの言い方は、これより大きな愛を持っている人はいないという言い方なのです。そしてそれは、御自身の十字架を前提としているものです。つまり、「友のために命を捨てることより大きな愛を持っている人はどこにもいない。けれども、私はその友のために命を捨てる愛によって、友であるあなたのために十字架の上で命を捨てる。わたしはそれほどまでにあなたを愛している」という、イエスさまの私たちに対する愛の宣言なのです。しかも、イエスさまが友と呼ぶのは、神さまに逆らっている罪人である私たちのことです。そうやってイエスさまは、これ以上愛しようがないほどに愛されたのです。そして、言われたのです。「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」と。あなたがたが、わたしの愛した友なのだ、と。

時折、「人から多く愛された人ほど、人を愛すようになる。逆に、愛されることが少ないと、愛することが出来なくなる」ということを聞きます。愛されたことの無い人は愛を知らないから、愛することは出来ないでしょう。けれどもクリスチャンは、イエス・キリストを通して、神の愛で目一杯愛されていることを知っているのです。そして、イエス・キリストが、自分のためにどれほどのことをしてくれたのか、その愛を知るからこそ、その愛に応えようとするのです。また、その愛に応えようとするからこそ、隣人との間にまことの愛の関係を結んでいく者とされるのです。

それゆえ、イエスさまは、「もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである」(15)と語られるのです。

友と僕ではどう違うのでしょうか。それは、主人が何をしているかを知っているかどうかということです。僕は、ただ命じられたことをその通りに守るだけです。しかし友は、そのように何も知らされないままに隷属する者ではありません。友は、イエスさまから全てを知らされているのです。それは愛の掟です。それもイエスさまが友となって、私たちのために十字架で命を捨てるという出来事を通して、神の愛が知らされているのです。そのような友とされているからこそ、イエスさまの掟を奴隷のようにただ行うのではなくて、イエスさまの思いを、その願いをしっかりと分かって、その愛の御心に応えて、私たちも、イエスさまの業に励む者とされているのです。

そのようにイエスさまは、私たちを選び、そして使命を託されました。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである」(16)。

イエスさまは私たちがこの世に出て行って実を結ぶようになることを望んでおられます。それは、互いに愛し合う交わりを形作るということです。教会は、この世にあって、神さまの愛によるつながりによって結ばれた共同体です。私たちは、イエスさまの友とされた者として、主の喜びで満たされながら互いに愛し合う交わりを形成して行くものでありたいと願います。